

企画者のことば



抗悪性腫瘍薬の開発は、戦時中、化学兵器として開発されていたナイトロジェンマスタードに白血球を減少させる作用が見出され、1946年に悪性リンパ腫症例に投与されたことから始まった。その後、多くの抗悪性腫瘍薬が開発され、臨床試験を重ねることで、現在の標準治療が作られてきた。以前の抗がん薬治療は、ひどい嘔吐などの副作用のなかで行うものであったが、支持療法も飛躍的に進歩してきた。一方、がんの分子生物学の進歩とともに、抗悪性腫瘍薬の作用機序や耐性機序の詳細が解明されつつあり、バイオマーカーの探索も進められてきた。さらに最近では、分子標的薬の開発が盛んに行われるようになり、それを後押しする遺伝子パネル検査も用いられるようになってきた。

現代のがんの薬物療法を理解するためには、まずは個々の薬剤がどのような分子メカニズムにより作用を発揮するかを知ることが必須である。それは、どのような機序でがんが薬物療法に耐性になるのかを理解することにもつながる。例えば、婦人科でよく用いられるプラチナ製剤やタキサン製剤にしても、それらの感受性や抵抗性をもたらす分子メカニズムの研究は日進月歩であり、ごく最近わかってきたことも多い。それらの知見は、感受性や抵抗性を予測するためのバイオマーカー開発にも生かされている。

また、がんの薬物療法に関しては、分子メカニズムの研究のみならず、臨床試験のあり方も大きく変わってきた。臨床試験における評価方法や統計的手法には一定のルールがあり、最近ではQOLによる評価も重要視されている。

がんの薬物療法は、すでに各種の治療ガイドラインがあり、それらと内容が重複するような書籍は不要であろう。今回は、婦人科がんの薬物療法について、産婦人科臨床医である読者の「なぜ」という疑問に答えて、深く理解していただく本を作ることを目標とした。全体に総論を多くし、特に分子メカニズムは、文字ではなく図で直感的に理解できるようにした。そして各論での各がん種の項目は、レジメンの羅列ではなく、キーとなる臨床試験について深く理解できるものとした。

各分野のエキスパートの先生がたには、このような編集方針のもとご協力いただき、執筆していただいた。婦人科腫瘍の薬物療法に関して、生物学から統計学まで「考え方」を理解することを目指した本特集が、読者諸氏の婦人科腫瘍の臨床に、深みと応用力をもたらす一助になれば幸甚である。

2021年11月吉日

近畿大学医学部産科婦人科学教室

松村謙臣